

2019/08/11

「皮の衣」

子どもたちは、大人を見つけると、「見てみて！」と言って、大人にそれを褒めてもらおうとします。この「見てみて！」という気持ちは、大人になってもなくなるわけではありません。自分のやっていることを見てもらって、褒めてもらいたい、そういう欲求は幾つになっても尽きないものです。

ただ、大人になると、そういうふう「見てみて！」と言うのは恥ずかしいことだという理性が働くので、おおっぴらにそういうことは言わなくなるだけです。でも、心はいつも褒めてほしくて「見てみて！」と叫んでいるので、自分のやったことを認めてもらえるように、やったことの痕跡を残そうとします。しかし、周りの人がその痕跡に気づかず褒めてくれないと、「イライラ」したり、悲しくなったり、どうせ自分は無価値だと思って落ち込んだりするものです。要するに、人間は誰もが、何かをすることで褒めてもらいたい、褒めてもらうことで、自分は価値ある者だと確認したいと思っています。

また、子どもたちは、あからさまに物の奪い合いもします。こういう所有欲も、大人になっても消えるものではないことは言うまでもありません。人は多くの物を所有することで、安心を得ようとして生きています。なぜ人は多くの物を持つと欲するのか、それは自分の価値が分からず、不安だからです。所有すれば、そのものに自分の価値を投影し、価値ある者になれた気がするのです、所有するのです。

■「いちじくの葉」を追いかける生き方

では、こういう「人間の生き方」は、いつから始まったのでしょうか。

創世記 3:7 このようにして、ふたりの目は開かれ、それで彼らは自分たちが裸であることを知った。そこで、彼らは、いちじくの葉をつづり合わせて、自分たちの腰のおおいを作った。

ここで、アダムとエバは、「いちじくの葉」で自分を隠すことで安心しようとする姿が見受けられます。彼らに「死」が入り込むまでは、彼らの目は神様の愛を見ていましたが、死が入り込んだことで、神様の愛が見えなくなってしまいました。その結果、自分を無価値だと思うようになってしまいました。

ここから、人は、何かを所有して自分の価値を確認しようとしたり、何かをすることで褒められ、自分の価値を確認しようとする生き方を始めるようになりました。神様の愛が見えていたときは、自分を何も飾る必要はありませんでしたが、神様の愛が見えなくなってからは、裸を恐れて、自分を隠し、自分の価値をそこに見いださなければならなくなってしまいました。

考えてみれば、私たちの人生というのは、生まれてから死ぬまで、「いちじくの葉」を追いかけ続ける人生と言えます。

■どのような「いちじくの葉」を身につけているのか

では、私たちは今日どのような「いちじくの葉」を身につけているのでしょうか。小さい頃は、おもちゃやお人形を持つことが、「いちじくの葉」になります。学校に行くようになると、誰が頭が良いか、誰が足が速いか、誰が才能があるか、誰が人気があつて、誰が格好良く誰が可愛いかな、そんなことの競争が始まります。そして、上位に躍り出た者は、それを「いちじくの葉」にします。また、子どもたちは、たくさんの習い事をします。習い事をして、これができる、あれができる、という「いちじくの葉」に自分の価値を見だし、そこにあるがままの自分を隠すようになります。

学生は、どれだけの資格を取得できたか、それを「いちじくの葉」にし、自分を隠し、部活や委員会ですぐ活躍できたか、それを「いちじくの葉」にします。また、どんな学校に入ったのか、どんな仕事に就いたのか、どんな業績が残せたのか、どんな肩書きが得られたのか、どれだけの報酬が得られるようになったのか、それを「いちじくの葉」にします。またある人は、どれだけの品性を身につけられ、どれだけ常識的な人間になれたのか、どんな立派な家庭を築けたのか、どんな立派な子どもが育ったのか、そういったものを「いちじくの葉」にしています。

しかし、こうした「いちじくの葉」は、競争に勝てば手に入りますが、負ければみすぼらしい「いちじくの葉」しか手に入れることができません。ですから、「いちじくの葉」を手にして生きる人生は、常に、挫折と敗北がつきまとい、自分より少しでも良い「いちじくの葉」を手に入れた人を見れば、ねたましく思い、そこには嫉妬や憎悪、怒りや落ち込みがつきまってくるのです。また、せっかく「いちじくの葉」を手に入れても、いつそれを失うのか、という恐れにつきまといわれます。そして、時間と共に、手に入れた「いちじくの葉」も役に立たぬ時が来て、結局は、新たな「いちじくの葉」を求めなければならなくなってしまうのです。

誰もが、自分の価値を手に入れて安心したかっただけなのに、誰もが「いちじくの葉」を手にする人生にやがて疲れ果てていきます。

それでも、悲しいことに人間はみな「いちじくの葉」を手に入れる生き方をやめることができません。こういう生き方を、聖書は「罪人」の生き方だと教えています。

「罪」というと聞こえが悪いですが、罪というのは、的が外れるという意味です。そもそも人は、神様の愛が見えなくなったことで、不安になり、自分が価値ある者かどうかを確認しようとしているのですから、もう一度、神様の愛を見ることで、自分の価値を確認すればいいのですが、その確認方法から的が逸れてしまいました。「いちじくの葉」で自分を着飾ることで、自分の価値を確認しようとしています。神様の愛ではなく、自分の行いや、自分の手にしたもので、自分の価値を確認するようになってしまったので、「的の外れ」というのです。ですから、これを「的の外れの罪」、「罪人」の生き方といいます。

■「皮の衣」

神様は、こうした「いちじくの葉」に身を隠す的外れの生き方をする人間を見て、かわいそうに思いました。いつも比較と競争にまみれ、嫉妬や憎しみに襲われ、不安に不安を重ねて生きています。アダムとエバも、自分の価値をいちじくの葉に身をかくしたものの、恐れは消えませんでした。そこで、神様は彼らに呼びかけ、彼らがそれに応答することで、神様との関係を回復されました。

しかし、それでも、彼らには神様の愛が見えませんでした。それで神様は、彼らに、一つの贈り物をされました。それは、22節に書いてあります。

「神である【主】は、アダムとその妻のために、皮の衣を作り、彼らに着せてくださった。」(創世記 3:22)

神様は彼らに「皮の衣」を着せられたのです。神様の愛が見えなくなって、裸を恐れて、いちじくの葉で身を隠した彼らに、神様は、「皮の衣」を着せてくださったのです。

ここで一つ皆さんに考えてみてほしいのですが、彼らは神様に皮の衣を着せられたとき、「いちじくの葉」を脱がされて、皮の衣をまといわれたと思いますか。それとも、彼らは「いちじくの葉」を着けたまま皮の衣を着せられたと思いますか。どちらだと思いますか。

実は、このことの意味は非常に重要です。というのも、この「皮の衣」はイエス・キリストの十字架の「ひな形」であるため、「いちじくの葉」を着けたまま皮の衣を着せられたのかどうかは、とても重要な十字架の意味の理解につながるからです。神様は、「いちじくの葉」を脱がせてから、皮の衣を着せられたのか、そのまま着せられたのか。

それを考えるために、この「皮の衣」が、どのようなものだったのか考えてみたいと思います。この「皮の衣」は、皮で作った腰の覆いのようなものだったのでしょうか。それともチョッキのような着物だったのでしょうか。答えは、この「皮の衣」の原語を調べると分かります。皮の衣の「衣」は、ヘブライ語の「クトーネット」という単語が使われていて、これは罪の贖いの務めをする祭司が着ていた「長服」と同じ単語が使われています。「長服」というのは、言葉のとおり、長い服で、首から足まで、全身を覆う衣のことです。この衣は、祭司だけでなく、高貴な階級の人でも着ていたことが聖書には書かれています。

つまり、神様がアダムとエバの為に作られた衣は、動物の皮で作った、彼らの全身を包む高級な服だったということです。

では、先程の問い、「皮の衣」を着せられたとき「いちじくの葉」をはぎ取られたのかどうか、その答えを考えてみたいと思います。答えは、NOです。神様は、彼らに皮の衣を着せられたとき、いちじくの葉をはぎ取ることはしませんでした。こんな物は無価値だと言っては

ぎ取ることはせず、神様は、そのままの状態の彼らに、優しく「皮の衣」を着せて下さいました。

つまり、あなたの罪を根こそぎとってから「皮の衣」を着せようということはしなかったのです。神様はただそのままの状態を受け入れ、それがどのような状態であっても、それを見えなくする服を着せて下さいました。神様は、彼らが作ったいちじくの葉の代わりに、腰の覆いを皮で作ったわけでもなく、チョッキを作ったわけでもなく、いちじくの葉を着けたままでも、全部を覆い隠せる皮の衣を着せて、包んでしまったのです。

ということは、この「皮の衣」は十字架のひな形ですから、神様は私たちの罪に対しても、あなたの罪を全部綺麗にしてから十字架の衣を着せよう、ということはないということなのです。私たちの状態がどうであれ、神様はその状態を全部包み込む十字架の衣を着せてくださるのです。

■なぜ「皮の衣」なのか？

では、もう一つ考えてみましょう。神様は、なぜ「皮の衣」を着せられたのでしょうか。なぜ「皮」で出来た衣でなければならなかったのでしょうか。「いちじくの葉」をつづった豪華な服でもよかったのではないのでしょうか。いいえ、それでは不十分でした。皮の衣を作るには、動物の犠牲が必要でした。動物を殺して、その皮を剥いで、皮の衣を作らなければなりません。そこには、痛みが伴います。犠牲が伴います。しかし、そうした犠牲が伴うものを贈られたとき、人は初めて自分はそれを受けるほどの価値ある大切な存在なんだ、ということを感じることができます。それで、神様は、「皮の衣」を作って、彼らに着せられました。そして、彼らがその「皮の衣」を見ていれば自分の価値を確認でき、安心していられるようにして下さいました。

これはまさに、イエス様の十字架を象徴しています。ヨハネ 15:13 に「人がその友のためにいのちを捨てるという、これよりも大きな愛はだれも持っていません。」とありますが、神が友である人間のためにいのちを捨てる、この犠牲が人に示せる一番の愛だったので、イエス様は十字架に架られました。そして、私の十字架を見ていなさい、これがあなたの価値だからと、示して下さいました。この十字架という「皮の衣」のおかげで、私たちは価値を知ることができるようになりました。今の状態が、罪にまみれた状態であっても、十字架は、私たちの罪も弱さも、不安も、恐れも、私たちが誇っているものも、卑下しているものも、ありのまま丸ごと全部を包み込んでくれて、あなたには価値があるということを示してくれます。

■私ではなく、キリスト

ところが、人は、皮の衣ではなく、自分で作った「いちじくの葉」がどんなものかということにこだわってしまいます。誰も神様が着せて下さった皮の衣を見ていないのです。もう皮の衣で覆われて、見えなくなった「いちじくの葉」を見て、何とかしようと必死になっています。

多くのクリスチャンは、自分の行いがどれだけきよくなったか、どれだけ御言葉が実行できるようになったかということに目を向けたり、また自分の罪を自己卑下したりするだけで、皮の衣を見ようとしません。

しかし、どんなに私たちが皮の衣の下にある「いちじくの葉」のことで一生懸命になっても、すでに私たちには「皮の衣」が着せられてしまい、いちじくの葉はもう何も見えないのです。私たちは「皮の衣」を着せられているので、私たちにはただイエス・キリストの十字架、イエス・キリストの愛、イエス・キリストの恵みがあるだけなのです。

この皮の衣を着せられた状態のことを、パウロはこう言いました。

「私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が肉にあって生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。」(ガラテヤ 2:20)

ここに、私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられる。とあります。これは、どういうことかということ、皮の衣を着た私たちは、もういちじくの葉を見ることはできず、キリストのいのちである「皮の衣」しか見えないということです。

そして、後半には、肉にあって生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっている、というふうにあります。ここは、少し訳を訂正したいと思います。ここに「神の御子を信じる信仰」とありますが、これは「神の信実」と訳するのが素直です。つまり、「いま私が肉にあって生きているのは、私を愛し、私のためにご自身をお捨てになった神の信実によっているのです」という訳になります。「神の信実」とは、イエス・キリストの十字架のことです。

要するにこの御言葉は、私たちの信仰がどうかという話をしているのではなく、神様のおかげで私たちは生きている、という話をしているのです。「私たちは「皮の衣」を着せられたので、もはや「いちじくの葉」をつづり合わせて一喜一憂して生きても何の意味もない。今、私が生きていられるのは、私を愛し、私のために愛を示すために十字架に架かり「皮の衣」を着せてくれた神の愛によるのだ」ということが書かれているのです。私ではなく、キリスト、皮の衣のおかげで私は生きていられるのだ、ということが書かれているのです。

■「皮の衣」を見て生きるには

私たちは、今も毎日、「いちじくの葉」を巡って、人を傷つけ、傲慢になり、心の中は憎しみやねたみでいっぱいになっています。自分で自分を拒否したくなるような思いが心の中に渦巻いています。そうであっても、イエス様はそれを責めずに、丸ごと全部包んでくださいます。赦されて、愛されて生かされているのに、イエス様があなたには価値があるという「皮の衣」を着せてくださっているのに、それでも私たちはそれを無視して、「いちじくの葉」を見て誇ったり、落ち込んだりしてしまいます。

ならば、どうしたら、「皮の衣」を見て生きることができるのでしょうか。最後に、その秘訣を三つ挙げたいと思います。

1, 苦しいときに祈る

「あなたがたのうちに苦しんでいる人がいますか。その人は祈りなさい。」

(ヤコブ 5:13)

当たり前のことですが、苦しいときに祈ることです。

神様が、私たちに「皮の衣」を着せてくださったのは、私たちが「苦しみ」から助け出したいからです。ならば、苦しいときには祈ることです。そうすることで、自分が苦しんでいるのは、「いちじくの葉」のことであって、もうすでに「皮の衣」が着せられているのではないかということに目を向けられたら幸いです。

2, 自分の赦された罪や失敗を忘れない

「わがたましいよ。【主】をほめたたえよ。主の良くしてくださったことを何一つ忘れるな。」(詩 103:2)

人はみな、罪を犯し、また失敗をするものです。しかし、私たちはそれを神様に赦され、覆われて生きています。それだけでなく、この地上で、周りの人たちからも赦され、覆われて生きています。

この地上は、神様の愛である「皮の衣」を学ぶ学校です。自分が周りの人たちから赦されたこと、またフォローされたこと、そうしたことは、すべて神様の「皮の衣」がどういうものであるのかを学ぶための経験です。ですから、自分の赦された罪や失敗を決して忘れないことです。そして、それを十字架のイエス様の愛と重ねて見ることです。誰かに支えられたというヒューマン的な愛を感動して受けるのではなく、そのことを通して、イエス様の十字架である「皮の衣」を学ばせていただいているのだという目を持つことです。

そうすることで、私たちは「皮の衣」を見る者になっていきます。

3, 何を失うことが一番怖いか想像してみる

「人は、たとえ全世界を得ても、いのちを損じたら、何の得がありません。」

(マルコ 8:36)

「いちじくの葉」のことで行き詰まるとき、悲しいことに、人は平気で神様を呪ってしまいます。やけになって、もう神様から離れて生きてやる、そんな思いすら持ったりするものです。

しかし、考えてほしいのです。本当に神様から離れて生きていけるのかどうかを。神様に祈ることもできず、頼ることもできない、「皮の衣」ですべてを覆われることもなく、神様の擁護を受けることもなく、死んだ後に天国に行く保証も失って、あなたはそれで生きていけるのかを。神様との関係を失うことを想像してみることで、こんな恐ろしいことはありません。私たちにとって最も恐ろしいことは神様との関係を失うことなのです。

幸いなことに、私たちは着せられた「皮の衣」を絶対に失うことはありません。ですが、「皮の衣」を失うことを想像してみることで、いかに私たちが日頃「皮の衣」に支えられているのか、それが見えるようになります。そうすれば、自分の口をついていた「つぶやき」は消え、「皮の衣」を見て生きる者へとなくなっていきます。